

民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン1
平成23年6月8日



講師
菅孝能

鈴木：横浜の都市デザインは、担当設置から今年で40年を迎えますけれども、それまでにさまざまな試行錯誤があつて成り立っているわけです。それを振り返る時に、パンフレットに載っているような、でき上がったものや事実だけを振り返るだけでなく、プロジェクトを行う時に、いったい専門家は何を考えて、どういう形で、その都市デザインの戦略やプランを考へるのか、ということを実際に担当された方に語っていただく。それが今回の「都市デザイン連続講座 vol.2」の主旨です。

そういったことはなかなか、表の記録には残らないわけなのですが、実際に都市デザインを行っている時には、非常に重要な知見を含んでいます。野中郁次郎先生は「暗黙知と形式知」という言葉を使われていて、そういう暗黙の知識と、形式的な知識—結果としてできたものや制度などがダイナミックに連動しているところが、横浜の都市デザインを見る時の一つの重要な視点ではないか、と思っております。

それで今回は、「民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン」というテーマで、山手総合計画研究所の菅孝能さんにお話を頂きたいと思ひます。

簡単にご経歴を紹介します。昭和40年(1965)、奇しくも横浜で六大事業が発表された年に東京大学の建築学科を卒業され、その後、大高建築設計事務所、そして和(やまと)設計事務所を経て、昭和58年(1983)、山手総合計画研究所を設立されて、本格的に横浜で活動を開始され、数多くの都市デザインのプロジェクをを手掛けられていらつしやいます。

きょうは、おおむね30年近く、横浜で活動されている民間都市デザイナーの立場から、これまでのお話と、これからの都市デザインの行く末について存分に語っていただく、と考へております。こういう形で菅さんにまともまつてお話を聴く機会というのは、私も実はなかつたので、そういった点では非常に期待しております。

菅：皆さん、今晚は。頂いたお題にちゃんとお答えできるかどうか分かりませんが、私が何をやってきたか、みたいなことを話しながら、少しでもお答えできれば、と思ひています。

丹下研究室と高山研究室を見る

今、鈴木先生から紹介がありましたけれども、私の簡単な履歴みたいなものから始めていきます。

私は、今から46年前の昭和40年(1965)に大学の建築学科を卒業しました。その当時、都市計画はどんな状況だったか、と言うと、私は、卒論は丹下(健三)さんの研究室で取つたのですが、丹下さんはちょうど、私が大学に入る前の年ぐらゐに、「東京計画1960」【図1】という計画が発表されました。当時「都市デザイン」とはあんまり言わない。都市計画というのがある意味、一般の人にも話題になつたような時期だつたと思うのです。丹下さんは「広島計画」とかいろいろやって、単体の建築ではない都市に対してもいろいろ発言、あるいは提案をされておりました。そういったことに対して自分なりに「将来、そんなことができるという夢みたいなことを考へたことを覚えておひます。

一方、丹下研究室と対照的な高山(英華)さんの研究室がありました。私は建築学科でしたけれども、4年になつた時に「都市工」(都市工学科)ができて、丹下研究室も高山研究室もみんな都市工の研究室になつたのです。

『SD』が3回程、横浜の都市デザインを特集していますが、その最初の号(1971年10月号)に、いわゆるプランナー論を田村さんが書いておひます。その中で、丹下さんは「デザイン派」ということで、建築を拡大するような形でやっていたけれども、現実の都市にはあまり、コミットできない、というのか、そういう理念的なデザイン、ということで紹介されている。一方、高山さんは「研究室派」みたいなことで、調査分析とか、あるいはそれを総合化した、一種の総合計画を提案している。それも総合計画なのだけれども、現実を動かすところまでなかなか行かないのではないのか、という話がかかれておひました。

私はそういう二つの様子を見ながら、と言って大学に残るつもりは全くなかつたので、学部卒で早々に実社会で仕事をしよう、と思ひて、「どこに行こうかな」なんて思ひていたわけですね。当時は、建築では

図1：東京計画1960
資料提供=菅孝能



土井一成
小沢朗

今井信二
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

大谷幸夫さんとか菊竹清訓さんとかいろいろ活躍している方がいて。そういう中で、大高(正人)さんのところに行ってみよう、というふうな気がしたのですね。

それは当時、大高さんが「坂出人工土地」という計画案【図2】を発表していて、ある意味泥臭いのだけれど、何て言うかな、現実のものになっていくようなもの、建築ではあるのだけれど、建築より都市の方に一歩踏み出したようなことを実際にやろうとしている、という感じがあったのです。それで「まあ、大高さんのところに行ってみようかな」ということで、大学の先生の紹介をもらって何とか入り込めたのです。そういう形で実社会に踏み出したのです。

都市をどう捉えていくか

卒論は、丹下さんのところで出しました。先輩の院生たちは、アメリカのいろいろな都市計画理論などを勉強していて、当時、一番新しかったのはケヴィン・リンチの『都市のイメージ』とかが読まれ始めて、原書でみんな読んでいました。またフィリップ・シールという人が、記号論的な形で都市を分析したり、あるいは、そういうものの組み合わせで都市の設計みたいなものができないか、ということをやったりしている。そういうものを卒論でまとめ、みたいなことになって、全然、右も左も分からなくて、ただ、「そういうのがあるよ」と紹介しただけのような卒論を書いた覚えがあります。

その時に読んだ本で、今も非常に大事に持っているものがあります。雑誌『建築文化』の「都市のデザイン」(昭和36年)とか「日本の都市空間」(昭和38年)というものを、丹下研究室、高山研究室の人たちで作られていて、「日本の都市空間」には磯崎新さんが巻頭論文を書いています。磯崎さんの名前は出ていないのですけれども、磯崎さんが書いたのです。都市をどういうふうに捉えていくか、という都市デザインの方法概念の変遷みたいなもので、最後にそういった記号論的なところに行き着くような話が紹介してあったのです。

そこに書いてあるのは、先ず実態論的な都市デザイン。例えばカミロ・ジッテという人が、ヨーロッパの都市空間のリジットな空間について分析しています。

ネガポジの建物とオープンスペースの関係、あるいは具体的にパスを用いて、このアーチの空間をくぐると向こうに広場が開けている等、言ってみれば具体的な形態で都市デザインを語っていた段階です。次にCIAM(シアム)などの機能論的な都市デザイン、機能的用途や土地利用等についてダイアグラムを用いて都市の配置を考えていく理論があった。その後、構造論的と言うか、都市の軸だとか道路パターンに着目した都市デザインのあり方という理論で、スミットンとかキャンディリスとかが、ニュータウンの計画をやったりした。丹下さんらの東京計画も、皇居から千葉の方に向かって、海上に一つの軸を伸ばして、その軸を中心に都市をつくっていく、というヒエラルキーみたいなものを明解に出すようなところが、構造論的である、と。

それでも都市の本質に迫っていない、というので「象徴論的都市デザイン」と磯崎さんは言っているのですけれども、ケヴィン・リンチとかフィリップ・シールのような考え方ですね。ケヴィン・リンチは『The Image of The City』というのを書いています。ポストンのまちとかアメリカの、主として東部の方のまちの分析をしながら、都市をどう捉えるかを示して、それを五つの要素のアイコンに置き換えて、こう認識すると構造化される、あるいは分かりやすくなる、ということを示したものです。

ディストリクト(district)、地区の一つのまとまりですね。まとまりが感じられるエリアをディストリクトと言って、それからパス(path)、要するに、その中の「通り」ですね。通りとしてのアイデンティティーを持っているところ。それからノード(node)と言って、街角のようなところとか広場とか、一つの焦点になるような部分ですね。それからエッジ(edge)と言って、いわゆる境界ですね。境界を感じさせるようなところ。それからランドマーク(landmark)と言って、塔だとかそういった目立つものですね。そういう五つぐらいの要素に分けて、都市というものを分析する。あるいはそういうものの配置、構成で、それぞれの都市を特徴付けていく、みたいなことを言っていて、ある意味分かりやすかったし、大変印象に残ったのです。

図2:坂出人工土地
資料提供=菅孝能



土井一成
小沢朗

今井信二
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

今から二十数年前ですか、神奈川県が県全体の景観計画を作る、というので、日本都市計画学会に委託して、実際の作業は私たちのところでやりました。その時に私は、この印象深い5要素に「パノラマ」というのを加えて、六つの要素で神奈川県全体を、ある種、記号論的に構造化してみると、神奈川県全体の景観の取り組むべき課題みたいなものが浮かび上がるんじゃないか、みたいなことをやった覚えがあります。大学の時に学んだこういうことが、その後も何となく頭の隅にいつも残っていて、時々、そういう形で使ってみる、というようなことをやった覚えがあります。

そんなことで、卒論自体は本当に何をやったのか覚えてはいないのですが、ケヴィン・リンチの本の印象は非常に強かった、というわけなのです。その後、若干違うのですが、例えばアレキサンダーのパターン・ランゲージとか、ハルプリンのRSVP サイクルとかある種の方法論ですね。こういったものはなかなか魅力的で、仕事の中でも、それを私なりに解釈して使ったりしたこともあります。

そんなことが大学の時の思い出としてはあります。

大高事務所が多摩ニュータウン

大高事務所は、3年間という非常に短い期間しかいなかったのですが、やったことは、多摩ニュータウンの計画【図3】と農協の二つをやりました。

多摩ニュータウンのことは、去年の北仲スクールで西脇(敏夫)さんもお話しになったと思うのですが、大高事務所に私と西脇さんが同期で入ったのです。彼は院卒でしたので、年はちょっと上でしたけれども、当時、大高さんのところでの番頭さんが藤本(昌也)さん。今、建築士会の会長をやっていますけれども一彼の下で、二人でこの多摩ニュータウンの計画というのをやりました。

当時、日本住宅公団と言っていたところで、港北ニュータウンなどをずっと長く手掛けられた川手さんがまだ若い頃で、一緒にいろいろ議論したりしながら、「自然地形案」というのをやろう、ということだったので、2800ha、30万人都市をつくる、ということで、

これを新住宅市街地開発法に基づいてやる、要するに、あそこの山を全部、公団が全面買収をして、そこにまちをつくる、ということだったのです。港北ニュータウンは区画整理ということで、もとの地権者に土地が戻っていく、という形なのですが、多摩ニュータウンは公団が全面取得して、公団がある意味好きなように絵を描ける、というものでした。

多摩ニュータウンの計画区域は、南北に細長い尾根が全部で十何本ぐらいあるような地域なのです。普通だったら「大造成」と言って造成掛けてしまうわけですが、谷の部分に集落があって、集落の部分は区画整理でやるので事業の手法が違うため、尾根の部分はなかなか平らにはできない、ということがあった。もう一つ、表土が富士山とか浅間山の爆発の後の関東ローム層で覆われていて、その下が「真砂土(まさど)」と言って花崗岩の粉になったようなやつで、これは造成すると固まらない、という話が当時あったのです。鹿児島島のシラスの地形と同じだ、という話で、あまり大造成かけられない、かけると地面が滑っちゃう、という話でした。それで自然地形案を考える必要がある、ということで、建築学会にその計画を委嘱されて、実際に作業をやったのは大高さんのところだったのです。

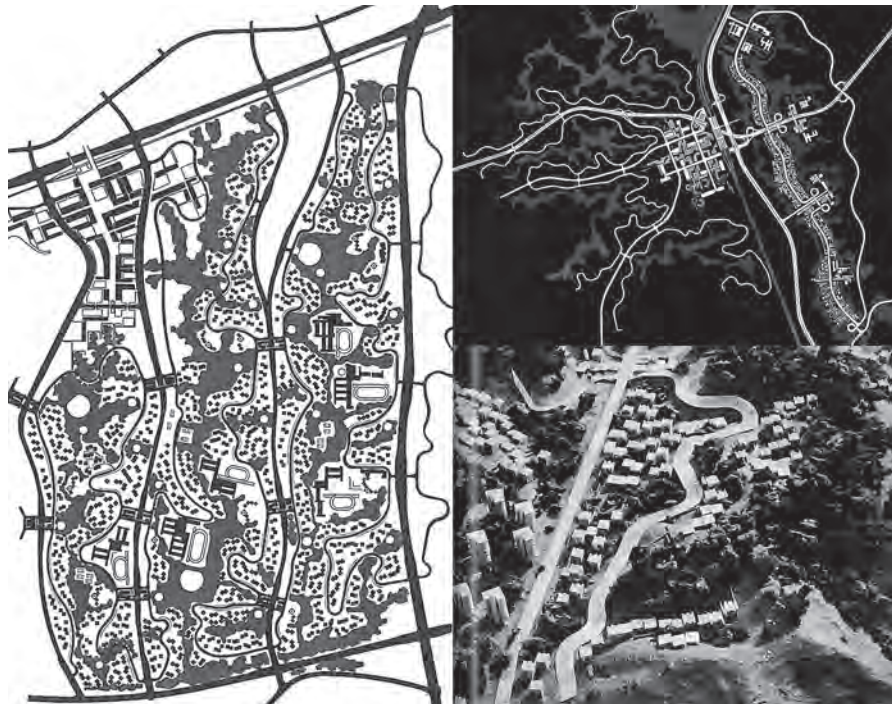
造成からの都市設計は初めて

それで、大高さんは非常に張り切っておやりになったのです。と言っても、都市の設計はそれまで、人工土地とか、静岡の総合計画みたいなものを少しやった、とかいうことはあったのですが、こういう造成まで含めて、とか、全くゼロからまちをつくっていく、というのは初めてみたいでした。

この提案ではラドバーン方式を取り入れたいわゆる歩車分離ですね。車でアプローチするところと、人がアプローチするところは全く別のシステムになっているので、要するに、車の心配をせずに行き来ができる、というのがラドバーン方式で、それをクルドサックなどとも言ったりしています。

そういうのを知ったら「よし、それで行こう」という話になりました。谷に幹線道路があって、そこから行

図3：多摩ニュータウンの計画
資料提供=菅孝能



土井一成
小沢朗

今井信二
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

き止まりの道路を頂上まで上げろ、というふうに言われて、その図面を延々と描いたのです。ところが、道路構造令というのがあって、例えば、時速20kmだったなら、これぐらいの勾配でなければいけない、とか、そういうのが関係するわけですね。それで山の斜面をコンパスで尺取り虫みたいに、線形を作って、うねうね上っていくわけです。10%以下の勾配で、高さ40mぐらいのところまで上るわけだから、長さが400m近いクルドサックがたたくことができるわけです。しかも斜面に沿ってやるから、多分、実際に走っていたら何も見えない、いつになったら着くんだろう、みたいなうねうねした道を描いたのです。描いてみて、さすがに「これはまずいだろうな」というふうで大高さんも思ったらしくて、最後に、中腹まで登って、あとは下に下りていくような道路に変わったのです。こんな計画を作った覚えがあります。

これでコスト試算もしました。造成の費用がどのぐらい掛かるか、道路の築造費がどのぐらい掛かるか。それから給排水、特に雨水排水がどのぐらい掛かるのか。それから、こういう斜面に全ての建物を造りますので、基礎は特殊な構造になる、というか、要するに片側は非常に高い基礎になったりする。建築費の中で、基礎のコストが少し高くなる、とか、そういうトータルなコスト試算までやりました。大造成よりは一応安くなる、みたいな結果の報告書を作った覚えがあります。ただ、この自然地形案は幻に終わってしまっただけです。

ただ、私は、この多摩ニュータウンの仕事でいろんなことを勉強しました。例えば造成の仕方、あるいは造成の図面の書き方とか。切り土というのは例えば「2割勾配」といって、1対2の勾配で切っていく、ということ。そうすると、例えば、2割の山があって、それをどこかで平らにしないといけない、と切ると、山の頂上まで切ってしまう。すると、大造成になってしまうわけです。そうではなくて、そういうところは切らないようにするとか、いろんなことを、こういう仕事で覚えました。

それから雨水排水。高いところから低いところへしか水が流れないので、それをどうやってうまく集めて

きて、道路の下に設ける排水溝に入れるか。それうまく、あまり急な勾配で流すと、水が溢れちゃう、とか、管径と管の勾配の取り方の関係とか。あるいは亀の子計算と言って、1本の雨水管に集めてくる時の流域をどういう単位で取るか、とか。あるいは道路構造令で、それぞれの道路のランクごとの、例えば曲率半径とか縦断勾配の取り方だとか。

今から考えると、そういう非常に基礎的なことをその時に学んで、とても勉強になった。その後の仕事にも、基礎知識として持っている、という意味でも非常に役に立った、というふうな感じがしています。

初の実作が山内農協

もう一つ、建築で担当したのが、横浜の山内農協と四国の新居浜農協です。山内農協というのは、今の田園都市線のあざみ野、昔の荏田というところ。当時はまだ、東急の田園都市線ができる前で、周りは全くの農村で、そこの農協計画でした。私、初めての実作というか、と言っても私はまだ駆け出しですから、私自身がこれを全部考えたのではなくて、先輩の所員の人と二人で担当しました。うちに帰るのは1週間に1回ぐらいで、毎日ずっと夜中の2時ぐらいまで、ああでもない、こうでもない、と言ってやりました。

その時のコンセプトが「羅生門みたいなのを造ろう」。要するに、中の機能はいずれ変わっていくんじゃないか、変わっても、建物としては残るものにしたいな、というようなことです。今、山内農協の建物はなくなったのですけれども。その時に、学校では「形態は機能に従う」という機能主義の建築論みたいなものを先生からいろいろ教わったのだけれど、実際にやってみると、あんまり関係ないな、と思いました。形態は形態、機能は機能、みたいなことがあるのだな、と。

10年ぐらい前に、オランダの建築家が『オープンビルディング論』という本を出して、日本でも訳書が出版されました。建築をアーバンティッシュ、サポート、インフィルという三つの要素に分解してものを考えていけばいいのではないかと、機能主義の建築論とい

うのはもう古い、という内容の本です。そういうのに巡り合って「ああ、あの時に話していたのは、こういうことなのかな」というふうに思ったことがあります。

アーバンティッシュというのは、要するにまち並みとの関係の表層のデザイン、サポートというのは構造とか設備、インフィルというのは中身。だからどういう機能、用途をそこに入れるか、ということで、それぞれ、もちろん関係はあるけれども、それぞれがある意味、独立している、というような考え方なのです。

和設計で地域計画部を創設

3年で大高さんのところをやめました。3年間やって一区切り付いたこともあって、ちよつと違うところで仕事してみよう、というので、大学の先輩のやっていた和設計事務所に入り直したのですね。

そこは全くの建築の設計事務所でした。私は、多摩ニュータウンをやったこともあって、建築単体も面白いのだけれど、都市の設計というものもぜひやってみたくて、地域計画部というのをこの中でつくったのです。それで、多摩ニュータウンの仕事とか公団の区画整理事業といったものを主にやりました。基本計画、マスタープランや基本設計といったことをやったり、道路や公園の基本設計、それから公団の住宅団地の設計などもやりました。そんなことが和設計時代の主な仕事ですね。

それから図書館の設計もやりました。図書館をやった面白かったことは、いわゆる建築設計以前のことをやれた、ということ。プランニング、要するに設計条件を固める仕事です。例えば、敷地がまだ決まっておらず、敷地をどこに設定すればいいのか、という時に、利用者の生活動線のようなものを分析して、こういう場所がいいんじゃないか、とか、規模などについても、利用人口と利用圏を想定して、それに対してどれぐらいの本の数をそろえればいいのか、職員はどのくらい配置すればいいのか、といったことをやって、最終的に建物の規模を決めていく。そんなことまでやった経験も、その後の、いわゆる都市デザインの仕事に役に立っているのではないかと思います。

横浜の高度地区の基礎調査

そんなこんなで昭和58年(1983)に事務所を設立するのです。横浜に持ってきたのは、いろいろききつつがあります。一つは、和設計時代にも横浜の仕事を少しやらせていただいた御縁あります。

少しその辺の話をして。和設計の時に、ある時、岩崎(駿介)さんから電話がかかってくる、高度地区の基礎調査をやってほしい、と言われたのです。なぜ、私の事務所に、と言うか和設計にそういう依頼があったかと言うと、公団の区画整理事業や団地の設計をやっていく時に、住棟、アパートの配置設計をやるわけですから。当時、日照問題というのが非常に大きな問題で、日照を確保しながら、どういふふう配置すると一番、密度が上がって、多くの住戸数を入れられるか、とか、例えば、きつちり南向きに建てるといふなる、とか、少し振るといふ、とか、あるいは高さを変えるといふなる、とかを和設計がずっと、いろいろと研究をして、学会などにも論文を発表したのです。そういうのを岩崎さんが、多分、公団から聞かれたので、そういう調査をやることになったようです。

当時、都市計画法が変わって、新しい用途地域指定になって、それまでは用途地域ごとに高さの制限があったのが撤廃されたのです。それで横浜市としては、撤廃されて自由になるのは、やっぱり環境を整備していくためにはよくないのではないかと、ということで、いわゆる高度地区を導入する必要がある。ただ、その時にどういふふうな規制を掛ければいいのかを検討しなければいけない、そのための基礎調査がいる。その結果、今あるような、いわゆる北側斜線と絶対高制限を組み合わせたものが作られるわけですから、その基礎的なスタディーをしたのが、私が横浜市と関わる一番初めですね。

その次の年には、その応用問題みたいな感じで、「新本牧地区の開発基本計画をやってくれ」と言われました。大体の道路の割付は決まっています、ただ、その中で特に今、桜並木になっている幹線道路沿いやセンター地区の建物のボリュームをどういふふう設定していくのか、あるいは、その建物の建て方の

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

図4：新本牧地区開発基本計画
資料提供＝菅孝能

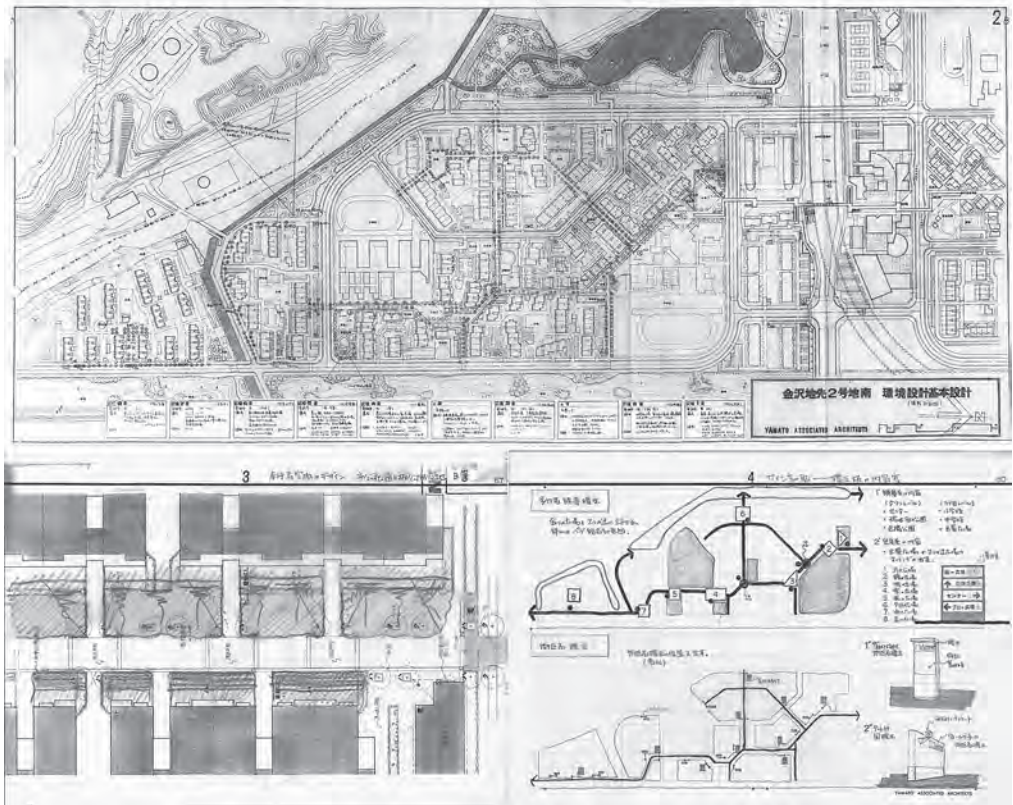
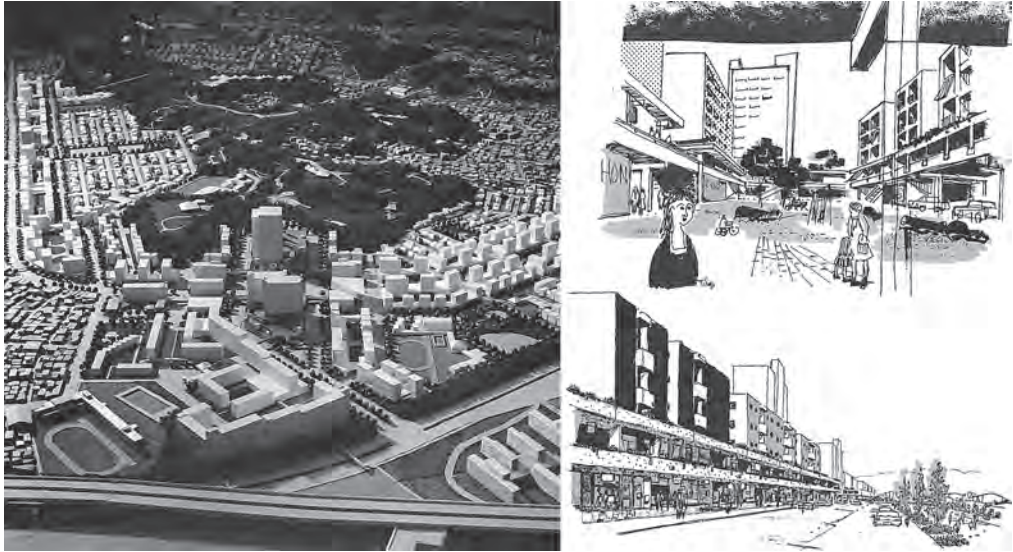


図5：金沢地先2号地南住宅地計画
資料提供＝菅孝能

図6：上永谷駅前広場
資料提供＝菅孝能



ガイドラインをどういう考え方で作るのか、あるいはその時に密度がどうなるのか、とかいうのをスタディーしながら全体計画を考えてほしい、というような依頼がありました。それで模型を作ったり、パースを描いたりしながらやった覚えがあります【図4】。

もともと全体の道路割のマスタープランは、確か榎(文彦)さんのところだったと思いますが、区画整理の案ができて、それに上ものをどのように配置すればいいか、というのが僕らの課題だったのです。この仕事は若竹(当時、三木)馨さんが担当されていました。

金沢地先の2号地南住宅地計画

その後もいくつかやりました。私が非常に印象に残っている仕事は、金沢地先の2号地南住宅地計画【図5】です。

これは『都市住宅』の特集で、まるまる1冊ぐらいでレポートが作られています。2号地北は、住宅公団が全部の建物を設計して建てたのです。そこは、確か5人の設計者の調整を、西脇さんたちが調整して一つの住宅地としての計画を作った、というものだったのです。

2号地南は、開発事業者が全部で5社です。住宅公団のほかに県の住宅供給公社、市の住宅供給公社、公営住宅、それから勤労者住宅協同組合とか、そういう5団体それぞれに設計事務所が付いた。その全体を調整してくれ、というのが僕らの仕事だったのです。

全体に、建物が景観的にあまりばらばらにならない、とか住環境上お互いに日照などで、阻害し合わない、といったことを、会議をしながら、それぞれの配置案

図7：上永谷駅前広場
資料提供＝菅孝能



を考えるのです。さらに、ある団地の中に通り抜ける通路を造る場合、そこと住宅との関係をどう作るのか、というのをいろいろ議論しながらやったり。あるいは、それぞれの団地の案内サインだとか、まちの案内サインみたいなものを、どういうふうにそれぞれ配置するか。それは、公共空間に立てるのではなくて、それぞれの団地の、言ってみれば私有地ですね、その中に立ててもらったりするものです。その原則をみんなで話し合いながら決める、とかをやりました。

そんなことをやって、当時としては「あつ、こういうのが、都市デザインというものの一つかな」というふうに思った記憶があります。

もう一つ、地下鉄の上永谷の駅前広場の設計をやりました。地下鉄の駅があつて、そこに一皮、商業施設が建っていて、それを抜けると駅前広場がある、という敷地で周りに住宅地が大きく広がっていて、そこから大勢の人が駅へ入っていく。そういう動線と車回しをどうやってうまく調和させながらやっていくのか、というふうに考えて、駅前広場全体の計画と、具体的な設計をやりました【図6】【図7】。

その時に、その動線を視覚的にも面白く造りたいな、というので、藤棚の下でバスを待つ、あるいは藤棚を通り抜けていくと駅に行く、という形の設計をやりました。

山手地区の基本構想

もう一つあります。これが、私が事務所を横浜に構えるきっかけになった仕事でもあったのですが、山手

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

地区の基本構想というのを頼られました。委員会を作って、いろいろ議論をしながらやりました。横浜国立大学の入沢先生、建築家の宮脇檀さん、前田陽一さんという映画監督、私も委員として、いろいろ議論しながら作った、という仕事です。

この時に心掛けたのは街全体を、一種の構造みたいなものと捉えて、どういう構造にするか、新しい構造をつくるか、というのを議論しました。山手本通りという道があるのですけれども、それと坂道とでいくつかのサーキットをつくって、などと提案をしたり。港の見える丘公園の入り口の広場はとても大切だ、ということで、周りの状況なども見ながら、こんなふうにした方がいいのではないかと、とか。ハードだけでなく、こういうまちづくりを進めていくには住民と一緒にやる必要があるのではないかと。住民と一緒にどんな仕組みをやっていけばいいのか、ということで、「山手まちづくり講」という言い方をしましたけれども、そういう地元組織を作らなければいけないのではないかと、そこで何をやるのか、と。ニュースを出すとか、みんなでまちのパトロールをやる、とか、いろんなことをやった覚えがあります。

そういうハードとソフトの両方の構想みたいなものを作りました。これがずっと、今も何となく山手の仕事、ということに関わる一番初めのきっかけになった、ということで、非常に印象に残っている仕事なわけです。

事務所設立以降も30年、山手と関わる

事務所設立以降も、山手の仕事をやっています。昭和57年(1982)以来ずっと、30年ぐらいつと、何がしかで関わってきた、ということになります。

その辺の話を少しさせていただきます。山手は、第2次世界大戦後、接收されて、昭和37年(1962)ぐらいに協議会ができて、接收が終わります。その後ずっと見ていくと、10年単位ぐらいでまちづくりのエポックがあって、変わっていくのですね。5～6年前に山手の歴史を整理していて、「ああ、10年ぐらいていろいろ、こう変わっていくんだな」というのが見えて、面白いなと思いました。

最初は接收解除の準備期みたいなのがあって、昭和47年(1972)に接收地の返還が終わると、次にマンション開発が頻発し、それに対して今もある「山手地区景観風致保全要綱」が施行されます。それから10年ぐらいたって、今度、先程申し上げた、「山手地区基本構想1982」【図8】を作るわけです。これは要するに、景観風致保全要綱を10年間運用してきて、そういう運用だけではまちづくりは十分でなくハード整備が必要だろう、ということと、住民との協働でもう少し進めていく必要があるのではないかと、なったわけです。その中で、実際にはどちらかというとハード主体のまちづくりが、その後10年ぐらいつと続くのですね。公園の再整備だったり、山手本通りを石畳にしたり、とか、いろんなことがあって、そういうことをずっとやっています。

ところが昭和63年(1988)に、港の見える丘公園の「拡張地域」に地下駐車場を造ろう、という計画を作ったのです。観光客が増えて、車が増えて、何とかならないか、という話が地元であつたのです。ところが、その駐車場計画に対して地元から反対が起きて頓挫しました。それが、ハード整備の一つの転換期になったのではないかと、私は思うのです。それ以降、そういう大きな整備はあまり行われなくなりました。平成4年(1992)に「山手まちづくり懇談会」というのが、市が住民に呼び掛けて始まり、官民協力で山手のまちづくりプランを作っている、ということをやっています。

一方、その中でいろいろ議論していく中で、開港5都市景観まちづくり会議というのが始まって、そこに山手の人も参加しませんかという話で参加した。そうすると、ほかのまちで、どんな住民活動でまちづくりをやっているのかを、山手の人たちも学んでいくわけです。その中で「山手まちづくり憲章」を作ったり、234番館の市民運営を実験的にやったりしました。

ところが平成13年(2001)に、今度はセント・ジョセフの問題が起きる。ここでもまた、マンション開発の反対運動が起きる。これがなかなかうまく行かなくなった。その時に地元は、要するに、行政だけに頼っていては駄目だ、自分達も取り組まなければならないことを悟って、「山手まちづくり推進会議」というのを作ったわけです。そこで自分たちで自主的なルール

図8：山手地区基本構想
資料提供＝菅孝能



を作ってやっていかないと、行政指導だけだとなかなか難しいというふうに考えた。地区計画を作ったり、まちづくり協定を作ったり、ということを10年近くやって今に至っています。今後は山手本通りの電線の地中化とか、みどりアップ計画での地域緑化計画とか、自分たちで環境整備をやっていく、ということをやっていますが、結果はこれからです。

そういうふうに10年ぐらいのタイムスパンで、少しずつテーマが動いてきている、というのが見ていると面白いな、と思います。その中で、都市デザインはどうなるのか。今、都市デザイン室は、直接は山手から手が離れているのですが、行政とどういった関わりを持ちながら、山手のまちづくりが進んでいくか、こののをこれからも見守っていききたいな、という感じがしています。

市が策定した「山手地区景観風致保全要綱」は先程申し上げた山手のまちづくり協定は、元町や新山下、あるいは南側のまちも含んでいるのですけれども、その中の山手町はまちづくりをつくり、重い地区計画を定めました。「1中高」と言っても15m建てられるところだったのですけれども、マンション反対運動から、今

度は「マンションといえども住宅なのだ、住宅だから、自分たちと同じように10mにしてください」というルールです。

学校とか教会は15mでもかまいません、と。山手は学校、女子のミッションスクールが多くて、これが一つの特徴、特色ですので大切にしていきたい、というのが地元の考え方。だけでも、セント・ジョセフのように学校がなくなって1中高でマンションが15mで建てる、というのはやはり、山手の住環境にとってはおかしいじゃないか、というのが地元の総意だったのですね。それを地区計画にした、というわけです。ただ、一部、過小宅地の部分とか、既にマンションが建っているところは除外せざるを得ない、ということがあります。

山手のまちづくり協定は平成17年(2005)から運用を始めました。山手は建築行為の多いところで、4年間ぐらいで100件以上あったと思います。結構、新築が多い。意外と建築行為の多いまちだな、と改めて感じました。これも毎月1回、協定委員会でそれぞれ1件ずつ審査して、協定に適合しているかどうかをチェックする、ということをやっています。

平成19年(2007)には「山手まちづくりプラン」も作

土井一成
小沢朗

今井信二
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

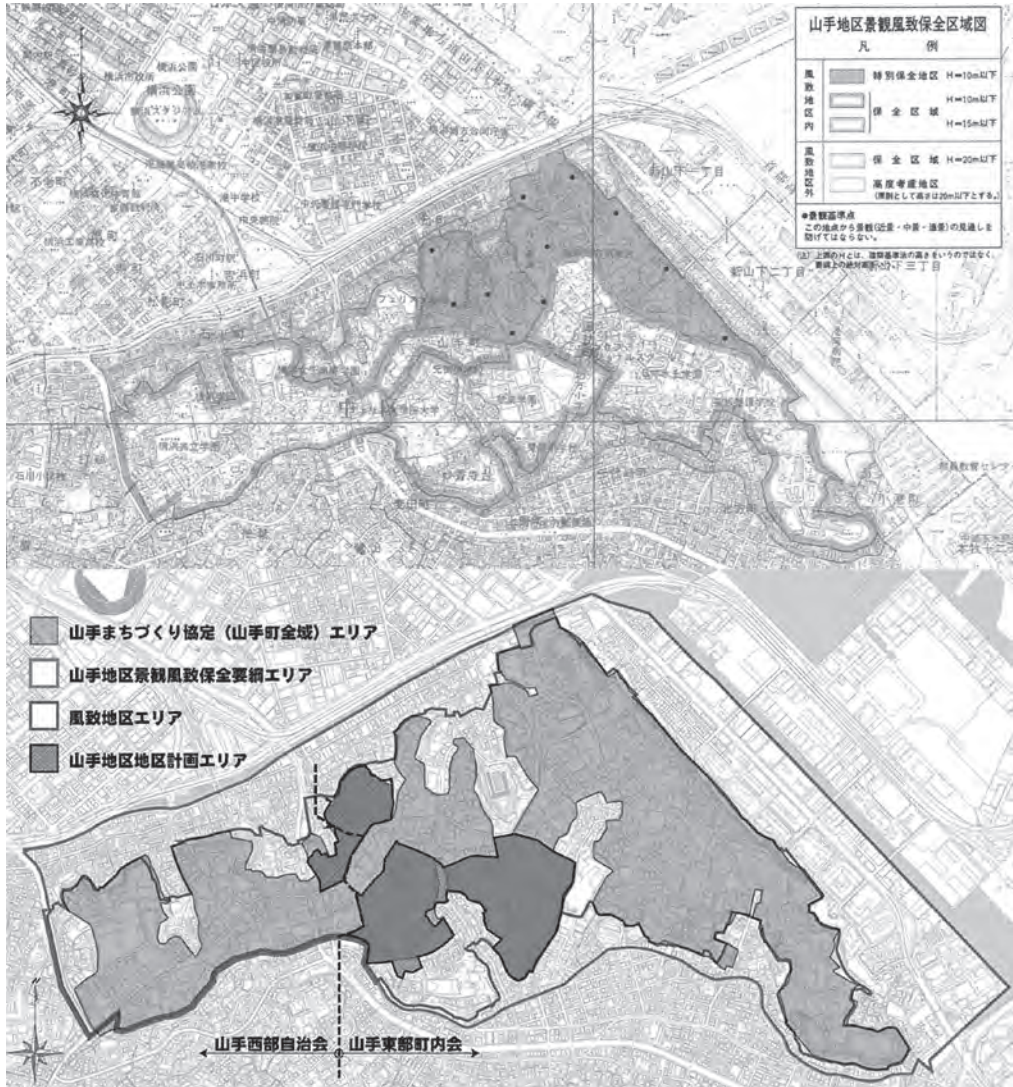
菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

図9：山手のまちづくり(山手地区景観風致保全要綱)
資料提供=菅孝能



V 民間都市デザイナーから見た横浜の都市デザイン 1

り、市の地域まちづくり条例による認定を受けていて、これに基づいた活動もしています【図9】。

一方、1軒の大きな宅地があつて、大きなクスノキやタブノキなどが敷地の中にあつたのに、その敷地が十数軒に割られてしまつて、それらの木は1本も残らず切られてしまった。こういうことがいくつも出てきて、今、どうしようか、と議論になっています。

それから地下室の問題です。いわゆる地下室は、今、建築基準法は容積に算入しない、ということでやっているの、申請書に記された容積よりも実際は1.3倍以上のものできるわけですね。そうすると、駐車場から何から全部、巨大になっていく、ということです。また山手の場合、高さ制限が、建物が接する一番低いところから10mというので、それがどこなのか、地下のドライエリアなのか、とかいろいろ議論があつて、若干あいまいな部分があつたのです。地元が事業者といろいろ話し合う中で、事業者の方が折れてやってくれた例もありますけれど、必ずしも全部が引くわけではない。

こういう非常に悩ましいことがまだいっぱいあるわけですね。そんなことを今、やっている、というのが山手の今のまちづくりの状況です。こういうことに、行政としても、どう関わっていくかが、これからの課題になってくるのではないかな、と思っています。

密集市街地の滝頭・磯子地区も

それから山手とは全然違う例を少しご紹介します。一つは「滝頭・磯子地区」という、いわゆる密集市街地のまちづくりをずっとお手伝いしています。「いえ・みち・まち改善事業」で関わっています。

国の密集市街地整備事業だと、建物の不燃化とか共同化とかを言っているのですが、現実にはなかなか、そんなに図式通りの話には行かないわけなのです。むしろ、現実には何かもつとソフトな話の方が中心になってくる。

例えば、避難個所がいくつかあり、そこへの避難ルートをどう設定するか、とか。あるいは4m未満の2項道路のうち、優先的に拡幅整備を図った方がいい

場所をどこにするのか、ということだとかを、みんなでいろいろ議論したり。それぞれの町内会で細かい避難ルートを決めたりしているのを、いろいろ束ねていくと、こんな感じになるのではないかな。境界沿いの作り方としては、例えば、ブロック塀などをできるだけ生け垣にしていこう、という申し合わせをしながら、まちづくりを進めていこう、ということをやっているわけです。「住まい方・暮らし方 BOOK」という冊子を作って、みんなで申し合わせ、ルールみたいなものを明らかにしていく。これをできれば、地域まちづくりルールのようなものにまで発展させられればいいな、ということをやったりしています。市で公園を作り、地元でメンテナンスをしたり、防災マップを地元の方と一緒にやっていこう、という取り組みもあります。

だから、ハードというよりも、どちらかと言うと、住まい方のお作法をみんなで申し合わせしながら、少しでも安全なまちにしていこう、というのが実態なのです。こんなこともやっています。

ドックヤードガーデンのアイデア

都市デザインの中で、僕としては面白い経験をしたな、と思うのはドックヤードガーデンです。

これは北沢猛さんと歴史を生かしたまちづくりのことでいろいろ話していく中で、北沢さんから、横浜博覧会の後、このドックが埋められて、それでさてどうしようか、という話を、何となくよもやま話をしている中で、相談みたいになって、私がスケッチをつくつたのです。「あれを一回、掘って、例えば、ガラスの屋根みたいなものを掛けて、半室内化すると、面白い広場になるんじゃないか」というようなスケッチを描いたら、「あ、面白いね。よし、やろう」というような話になったのです。それで、北沢さんが東大の村松貞次郎先生に委員長になってもらって、このドックの所有者である三菱地所と横浜市で、共同で委員会を作って、最終的に地所が今のような整備をしたのです【図10】。

こういうことができたのは、僕ら民間のプランナーの提案を受け止めてもらう、というか、何かお互いに波長が合ったから、と思うのです。これは、そういう面

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

図10:ドックヤードガーデン(旧横浜船渠石造ドック)
資料提供=菅孝能

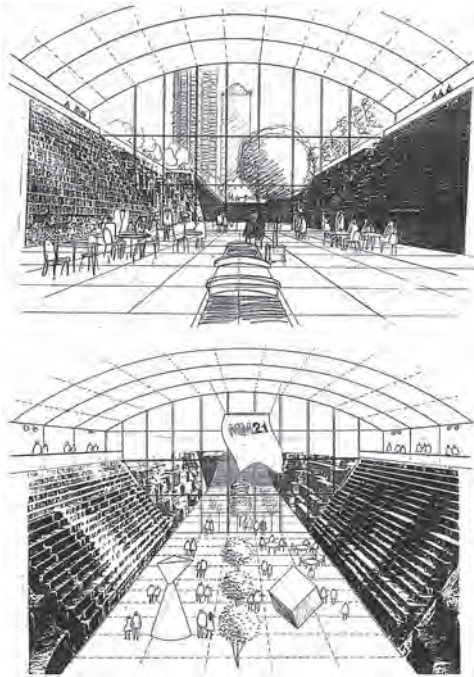


図11:独自に提案した瑞穂ふ頭
(山手総合計画研究所 2011年年賀状より)
資料提供=菅孝能

で僕にとっては、ある意味、非常に印象に残る仕事だったのです。ドックヤードガーデンのデザインそのものは三菱地所がやったのですが、委員会の資料作成とか、解体調査を三菱地所がやるのを手伝う、などの形でやりました。

東横線の地下化による跡地利用

行政から委託を受ける仕事と同時に、せっかく横浜でいろいろ仕事をしているので、自主的な提案みたいなものをいろいろしていく機会があればやっていきたい、ということをやっていることもあります。

東横線の地下化に伴って、跡地をどう利用するか、ということで、神奈川区で委員会を作ったのです。その委員会で私は委員になっていたのですが、懇談会的な委員会で、皆さんがいろんなことを話して、何となく方向性がまとまっていなくて、私、ちょっと業を煮やしまして、「じゃあ、絵を描いちゃえ」と提案をぶつけてみたのです。

別に、この通り造る、というのではないのですが、その絵のみそは、反町駅と横浜駅の間にトンネルがあるのですが、トンネルを何かうまく利用できないか、ということで、トンネルを歩行者専用で歩いて行くことにして、壁には映像を映したりする、というような話です。そこから出たら国道の上に架かっている鉄道の鉄橋を渡っていけるようにしましょう。今、東急ホテルのあったところに再開発の計画がありますが、あそこまでそのまま行けるようにする。要するに歩行者動線をどうつくって回遊性を作るか、という話だとか何かで、単純に、地上部をどうするか、というだけではなくて、全体を考えましょうよ、というような提案をしました。今、東白楽から反町にかけて東横線の線路跡地がプロムナードになっています。このプロムナードをさらに横浜駅まで延長して、横浜駅-桜木町駅間の東横線高架跡のプロムナード計画となれば、東白楽から山手まで続く長大なプロムナードが出現すると思うのです。

それから、この頃は鈴木先生のリードもあって、関内のエリアマネジメントにも、私も参加させていただ

いています。一つは、戦災復興の建物で、まだ残っているもの、私がかつた事務所もそうだったのですけれども、そういうものも、都市デザインが始まる以前の、横浜の戦後の都市計画の一つの成果です。建物そのものは、かなり老朽化しているのが多いのですが、そういうものをうまく保存活用できるのか、というシンポジウムもやったりしています。

もう一つは、自転車がこの頃増えていますよね。通勤・通学のため、関外などに住んでいる人が、自転車でMM線の駅まで来て、乗り捨てていつて東京に通勤する、というものもあるし、ホテルや中華街などでは、従業員が、24時間制などがあって電車では通勤しにくい、ということで自転車とかバイクで来ていて、それが路上に放置されている。そういうのがどんな状況になっているかを調べて、どういうふうにしたらよいか提案をする、ということもしています。

これからのこととしては、関内の裏路地の再整備を、地元の人が「市民まち普請事業」としてやりたい、というので、手伝ってあげましょう、ということで、今、絵を描いています。

横浜駅周辺計画に独自提案

それから横浜駅周辺の大改造計画も、これも実は半分仕事…みたいなことでやっています。ある大手のコンサルが担当したのですけれども、少し手伝ってくれ、と言われてやっていく中で「どうも、それだけじゃ物足りないな」と僕ら独自の計画を作ってみました。

都市の構造として全体をどういうふうにするのか、という提案をしました。外周道路を地下に通して、駐車場のネットワークをつくる、とか。駅前広場が、この前の地震の時の、帰宅困難者を見ても感じたのですけれども、全然、容量が足りないですよ。もっとオープンスペースを増やさなければいけないのではないかと、ということなどを提案しています。

今年の年賀状【図11】で提案したのは瑞穂ふ頭のデザインです。鈴木先生中心にインナーハーバーなどの議論が始まっているのですけれども、別の視点から、ということでやりました。たまたま、僕ら、みどり

アップの基本計画のお手伝いを少ししていたので、瑞穂ふ頭が将来、返還されたら明治神宮でやったように全部を緑の島にできないか。インナーハーバーを日本の回遊式庭園に見立てて環境整備をする。回遊式庭園というのは池があつて、池の周りをずっとそぞろ歩いて、真ん中に必ず小島があつて、鶴亀の島がある。そういう日本の伝統的なランドスケープ・デザインを、こんなスケールに拡大するとどうか。そういう提案をしてみました。

こういうことも民間の視点で、ある意味、自由にできますから、せつかく横浜で仕事をさせてもらっているのです、少し違う視点で議論を持ち掛ける、ということもやっていきたい、というふうに思っているところです。

民間からの見た都市デザイン40年

都市デザイン室の仕事が市行政全般というか、まちづくりの全般に対して他の都市と一番違うところは、都市づくりに対してある種の革新的なプランナーを目指してきたのではないかと、そのころに一番、この40年の評価があるのではないかと、思っています。

田村さんが『SD』の最初の頃書いた文章の中で「都市計画というのは環境計画だ」と言っています。それはどういうことか、ということが四つくらいあつて「人間環境を総合的に最適化する」—この人間環境と総合的という言葉はよく使っています—それから「利用可能な手段を最も有効に用い、実践手段を提供する」、また「戦略的なプログラム作成に関する総合技術」を發揮するのだ、と。あるいは「計画推進をコントロールしプロモートする総合技術」をプランナーは持たなければいけない、ということをおっしゃっています。そういうものを100%実践している、というわけではありせんけれども、そういうものを目指してきてやってきたのが、横浜の都市デザインなのだろうな、と思います。

そういう面で、都市デザインは都市計画の整備・開発・保全の全てに当たるわけだし、そういうものの協議や調整、あるいは官民協働、また単なるハード整備だけでなく制度や協定などのソフトまで含めてやってきた、というのが、横浜市の都市デザインの

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

一番評価される場所ではないかな、と思っています。

今はなくなりましたけれども、企画調整局という組織は、当時、非常に新しいと言えるものでした。縦割りの中に総合化する部門をつくり、そこが都市づくりを引っ張ってきた、ということがとても新しかったのではないかと思います。

先程「岩崎さんに呼ばれた」と言いましたけれども、その時に非常に印象に残ったのが、今もあります大テーブルですね。あそこでみんなが、何か作業というか、議論をしょっちゅうしていて、非常に印象に残りました。

行政というのはある意味、縦割りでなければいけない部分があるわけですよ。ただ、それを横につなぐプロジェクト・チームを、仕事のたびごとにつくってやってきた、ということが、一つ、よかつた。そういう面での横つなぎをした。いわゆる局間のコミュニケーションは、そのプロジェクト・チームの時だけでなく、後でも、例えば、電話一つで何かいろんなことが依頼できる、というようなことを可能にした。私も、仕事のうち合わせに行くと、そういう経験がたびたびあった。風通しがいい、というところがあったと思います。そういうところがこれからどうなるのか、というのが一つの課題かも分かりません。

若手育成はプランナーにも課題

それから六大事業のような大きな都市デザインみたいなものが提案しにくい時代になっていると感じます。インナーハーバーの議論があつて、それが一つの大きな都市デザインなのかも分からないけれども、なかなかビジョンが見えにくい時代になってきている。そういう中で、今後の都市デザインをどう考えていくのか、というのが一つの課題かな、という思いもあります。

また前はインハウスでやる部分がいくつかあつたと思うのです。例えば、根岸の駅前広場とか、あるいは横浜駅東口の換気塔。あれはサイコロを積んだようなデザインで、北沢さんがデザインされた。そういうのがあつたのですけれども、今、ほとんどそういうことはやられてなくて、みんな外注になっている。この辺

はどうなのかな、たまにはやってみるのもいいのではないかな。そういうことも含めて言うと、40年たつて、やはり世代継承というか、この北仲スクールの目的もそうなのかも分かりませんが、若手の育成は今の時代、横浜市の都市デザインにとって、かなり大きな課題かな、という感じがしています。

これは僕ら、民間のプランナー、都市計画などのコンサルタントにとっても大きな課題なのです。というのは、一つは仕事が減ってきているので、一人でやられている事務所がすごく増えています。そうすると、それはある意味の悪循環になるのです。一人でやれるところに出す仕事の、内容とか量は、やはり小さくなる。それが続くと、その会社の経営も圧迫していくことになる。僕は、自分の事務所では、それはできるだけ避けたい、と今のところは思っていて、できるだけスタッフを抱えて仕事をやっていきたい、と思っています。この辺は民間のプランナー側の問題でもあるのです。そういう形での若手の育成を、民間の側でもいかにやっていくかが一つの課題かな、と思っています。

というところで、取りあえず、終わりにさせていただきます。

鈴木：どうもありがとうございます。

この世界に入られた時点から、かなり横浜とのつながりが深いのだ、ということを変えて思いました。菅さんとはかなりいろんなところで一緒に仕事をさせていただいて、断片的に情報は得ていました。横浜とのつながりについて言えば、高度地区の調査が一番初め、ということで、ある意味で70年代の横浜の都市デザインの始まりの時点から関わり始めていたようにも思います。山手の仕事がつきかけとなつて横浜に事務所を移されることになつた、というお話でしたけれども、「横浜に来ない？」みたいな話が、実際のところ、あつたりもしたのでしょうか。

「横浜には都市計画コンサルがない」と

菅：そうですね。山手の仕事が終わつた時に、都市デザイン室の方から言われました。というのは、当時横

浜にはいわゆる僕らみたいな都市計画コンサルタントが一人もいない。全部、東京のコンサルに仕事を発注しなきゃいけない。それで、議会からもよく言われる、というのですね。予算の説明をする時に、要するに、地元優先というか、地元をもっと大事にしろ、みたいなことを言われるけれど、地元にはいないのだ、というようなことを言われました。ちょうど私もその時、そろそろ、僕も独立しようかなと思っていたので、「これは、そういう意味では、一つの後押し、背中を押してくれているんだな」という感じもしました。

きょう、話をしなかったのですけれども、仕事以外で私、住民主体のまちづくりシンポジウムというものに、いろんなところで積極的に出ていたのですね。大体、地方の小さなまちが多いのですけれども。そういうところを見ていると、結構、それなりに頑張っている。ハードな整備というのはあまりなくて、人と人をどうやってつなげるか、その中で、自分たちでどんな活動をして、まちをよくしていくか、というようなことをやっている。そういうことを見ていると、何も東京で仕事をする必要はないな、という思いがありました。もう東京でやる時代じゃないんじゃないか、とその当時、思っていたので、横浜で何とか見つけよう、というようなことで始めたわけです。

山手を見続けてきた生き証人

鈴木: お話を聞いて、何かの縁があるのではないかな、と思ったことがあります。田村明さんにお話を聞いた時に「高度地区を掛ける直接的なきっかけは何ですか」と聞くと「やっぱり山手だ」と言っていました。山手の、港の見える丘公園から見下ろしたところに、二つビルが建つことがきっかけとなって始まったことで、最終的にはかなり政治的に決着するのですね、ビルの上を削ってもらう、というような形で。ただ、このままではやはりいけない、ということで、一つは山手景観風致保全要綱というものを作る、もう一つは全市的に高度地区を入れる、という話になった、ということがあります。この高度地区の調査をやられた、というのは、やはり山手からの縁があつて、さらにまた80年

代になつて山手に引き寄せられて、現在の山手の地区計画であるとか、まちづくりに関わってらっしゃるのは、何かある種の縁みたいなものがすごくあるな、というふうに思いました。

企画調整局時代から、山手のまちづくりはすごく重要視されていて、その後、企画調整局が解体になって都市計画局に都市デザイン室ができてからも、ずっと横浜の都市デザインのモデル的な事例として取り組まれてきた。最近では、都市デザイン室は直接的に山手地区に関与しなくなつてはいます。そういう意味で、ずっと山手のまちづくりを見続けてきた生き証人というのは、地元の方とプランナー、専門家としてはやはり菅さんなのかな、というふうな気もしていますね。10年ごとのサイクルがある、ということで、一つのまちではあるのだけれども、何らかの形でまちが動いている。社会全体も動いている。それに応じて、ずっとそこに根を張って活動するプランナーの重要性というものをすごく感じました。

率直な質問ですけれども、当初から、割とローカルに根を張ってやるプランナー、あるいはアーバンデザイナーというものの仕事は確立できるな、という意識はあつたのでしょうか。

菅: いや、それはなかったのです。ただ、和設計の時にやった多摩ニュータウンや公団の区画整理事業というのは、郊外の新市街地をつくる仕事であり、そういうことをやっていく中で、こういう仕事はもう先行きないと感じていて、やっぱりこれからは既成市街地をもう一度、いかに住みよく、あるいはもっと魅力的にすることが大切で、そういうものに関わられたらいいな、と思っていました。それを横浜市が、都市デザイン室として既に取り組んでいる。その中の少しでもお手伝いできる機会があつたら面白いな、とは思っていました。それで事務所を始めたのですね。

その時に、もう一つ思ったのが、横浜に事務所を構えたのだけれど、横浜の仕事だけに、沈潜したくないな。だから、横浜でやって得たものを、ほかのまちでまた展開するとか、ほかのまちでやったことを横浜の中に持ち込む、とか、そういうやりとりが自分の仕事、ある

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

いは事務所の中でできると面白いな、というふうには思っただけですね。それはかなり心掛けてやってきたつもりではありません。

鈴木：横浜は都市計画の大先輩がいっぱいいて、やりたい人もいっぱいいるのですよね。私は横浜以外の仕事をする機会がどちらかと言うと多くて、菅さんと横浜以外の仕事をする機会が多くて、当初は、外から横浜の都市デザインを見ていたような気もするのです。

民間と行政の都市デザイナーの関係

民間のプランナーと、あるいは都市デザイナーと、行政との関係みたいなところに、お話を移していきたいと思います。

菅さんのように、横浜に来ないか、と言われて、横浜でいろんな経験をさらに積まれて、実は、よくよくお話を聞いてみると、横浜の都市デザインの部署だけではなくて、いろんな部署をまたがって仕事をされているので、行政の外側で仕事を横つなぎしているような面もあるのです。

行政では、人間がどんどん入れ替わっているけれども、菅さんは一貫して都市デザインに関わっている。そうすると、ずっと体系的にもものを見ることができたり、あるいは、こういう戦略がもともとあるべきではないか、ということもできる。単純に仕事を受けるだけではなくて、むしろ、こうあるべきだ、というような道筋が見えている菅さんのようなプランナーの方が、何人かいらつしゃるような気がします。そういった意味で、民間の都市デザイナーと行政、官の都市デザイナーとの関わりについて何か考えていらつしゃること、というのはありますでしょうか。

菅：そうですね。「仕事にはもう一翫（イーハン）つける」というのが私のモットーの一つであるのですね。それは、今、鈴木先生がおつしゃったような話で行くと、行政のある部署からの委託は、ある一つの部署の仕事の範疇で、こういうことを調査してくれ、とか、こ

ういう計画を作ってくれ、となるわけですが、それにはちゃんと応えなければいけないけれども、それ以上に、本来はほかの局の仕事かも分からないものも含めて、気が付いていないこんな価値・課題があるのではないか、こういう計画であるべきなのではないか、というのとはできるだけ出したい、というふうにして仕事をしてきました。それが相手にちゃんと伝わっているか、とか、そういうものが受け止められて成果として出せているか、というのとは分からない部分もあるのですけれども、そういうことはかなり意識してやってはいますね。

その一つに以前、新山下の区画整理の構想というプランの依頼を受けました。第1回の都市デザインフォーラムの後の頃で、インナーハーバーの概念が提示されたころでした。私の頭の中にはこの構想があったのです。新山下の区画整理の案は、真ん中の貯木場を半分埋め立てるものでしたが、私はフォーラムで提示されたインナーハーバーを踏まえて、新山下の位置づけ、他地区との交通なども考えた提案をしたことがあったのです。それはそれで、どこまで受け止めていただいたのか、分からないですけども、今になってみると、その時にスタディーしたことは、今、鈴木先生がおやりになっているインナーハーバーなどを考える時の、私の一つの出発点みたいにもなっているので、やったことはどこかで何か多分、生きてくるのだろう、というふうには思っていて、そういうふうには心掛けていますね。

鈴木：菅さんには、インナーハーバーの構想を検討する時にも少し、アドバイスを頂いたりしました。かなり継続的に横浜の都市づくりのことを担っていらつしゃいます。行政の方でも、菅さんのように横浜のこれまでの流れなどに理解がある方ですと信頼やまた期待もあると思います。このようにお互いにノウハウを共有し合っているところもあるのかな、と思いました。

きょうは山路清貴さんが来ていらつしゃるので、きょうの菅さんのお話を聞いて、何か感想、コメントなりをお願いしたいのですけれど。

都会派で洗練されている

山路：山路でございます。私はこの講座の4回目に、2人目の民間のアーバンデザイナーとして話す予定になっています。菅さんと私は、民間と言っても、やっていることはかなり好対照のことがあります。菅さんはもう風貌からしても、非常に都会派で洗練され、制御が利いているのですけれども、私はどちらかと言うと下町派でその辺からしているいろいろ入り方がだいぶ違う。

アーバンデザインの中でも、きつといろいろな入り方がある、ということはきょう、菅さんの話を聴いて改めて、知ったこともあります。

横浜はそれだけ広い、ということもありますよね。菅さんの「絶対、ほかに渡さないぞ」というのは、例えば山手というこだわりがある。それは都心部を構成しているところで、横浜駅の周辺もそうですし、関内の中の日本大通りなど、菅さんは割と都心部担当なのですよね。私がやっているのは周辺部であったり、実際にも下町地区だったりします。

やはりそれぞれで、同じ気持ちでいるとうまく行かないのが横浜で、それだけ多様なのですよ。また郊外に行くと、郊外にそれぞれ違う横浜があります。横浜のアーバンデザイナー、プランナーはこのように臨機応変さを求められるなあ、と感じます。大横浜として持っていないといけない背骨はあるのですけれども、それに加えて、各地域での個性とか多様性も認識しないと、うまく行かないのが横浜のかな、という感じはしていますね。

最後にハードにどう関連してくるか

菅：僕は、最終的にはハードな空間の整備が一番興味があるのですよ、どうしても。それは、何て言うのかな、しょうがないのか、と思っている。ソフトも大切だ、いうことは十分、分かっているのですけれども、「それが最後に空間にどういうふうに関連してくるか」ということを、知らず知らずのうちにも考えてしまっているのですね。

先程申し上げた地方の小さな中山間地域みたいなところでのまちづくりのシンポジウムも、それはそれで面白いのです。ただ、何となく物足りなさを覚えるのは、それが最後、どういうふうハードにつながるのかな、というのを常に考えてしまうところがあるのですね。そこが自分の欠点かも…というふうには思っていますけれどね。

野原：単純に感想を言いますと、先日、菅さんが当時の図面が並べられていました。その中、例えば、日本大通りの検討している案が3案、横に並べられている。何というか、まさにあそこに横浜の都市デザインの「知」が蓄積されているな、という感じがしました。しかも、そのダイナミックなアーバンデザインの現場で起きている生の状況みたいなものが、すごく見られました。

私は菅さんと今まで、横浜の仕事を一緒にさせていただいたことがそんなになかったのですが、外から見ていたのですが、民間のプランナーの方々が、どういうアンダーグラウンドで、いろんな検討をされているか、というのをなかなか目にする機会がなかったので、改めてそういう生の都市デザインの息吹のところが見られて、本当に感動したな、というところがありました。

何かあつたらすぐに対応できる

質問としては、先程も鈴木先生の方から、菅さんが、例えば、横浜の仕事をやるに当たって、都市デザイン室のみならず、いろんなところ部署とやられていることによって、外の横つなぎをしているのではないかと、というようなお話があつたのですけれども、実際、そうやっていろんな部局の方々と、いろいろ仕事をされる中で、都市デザイン室の場合と他部局とやる時との、アプローチの違いがあつたりするのか、それとも、菅さん自身は一貫して何か一つの貫くものがありながら、むしろ、それにミツパチの受粉のようにいろんなものを花咲かせていくような、そんなものであるのか。その辺をもう少し踏み込んでお話を伺えたらいいな、と思いましたが、可能な範囲でお話を伺えれば、と思います。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

菅：そうですね。違いと言うと、一つは、都市デザイン室は今も行政の中で横の人脈が結構あって、何かあったらすぐに対応ができる、というのはやはり40年の蓄積かな、という感じがしますね。特に20年ぐらい前は、そのようなつながりが今よりももうちょっとありました。他の部局にも横のネットワークの中で仕事をしていますが、IT技術により情報交換がスムーズですから「ここにこういう資料があります」とか、その局ではどんなことを考えているか、なんらかの形でこれらのつながりができればいいな、と思っはています。でも自然にできていたのが、都市デザイン室だったのではないかなと思います。

鈴木：横のつながりのネットワークの質がこれから変わっていくだろう、というのは、確かにご指摘の通りだと思います。あるいは、かつて、いろいろデザイン調整とかやっていったノウハウが、ほかのところに移って、要は別のところでもある程度、自前でできるようになってきた。そういうスキルというか技術が、いろいろなところに伝播していつている、という状況もそれに加えてあるのではないかな、と私も思います。

都市デザインの新しいニーズ

質問者1：例えば、一見関係ないように見える部署と、都市デザイン室が連携する時は、どういうやり方があるのかな、とずっと考えているのです。今までは結構、面的にダイナミックな動きがあるところでの都市デザインはあったと思うのですが、それを一部の部局でやろうとすると、かなり矮小化されて局地的なところでのデザインとか、例えば建物のデザインとか、まちづくりというよりも本当にワンブロックぐらいのところのデザインとかになってしまふのかな、と思うのです。それだとやはり、今まで都市デザイン室が担ってきた機能みたいなものとはかなりかけ離れて違うものなのか、それとも、これから都市デザイン室が歩んでいく道として、そういうことも視野に入れながらやっていくのはありなのかな、ということをお聞きしたいなと思ったのですが。

菅：僕は基本的に、全て、今おっしゃったようなことも全部、都市デザインとひっくるめてもいいのかなと思うのです。そういう建物のデザインなども、結局、隣の建物との関係とか、周りの環境との関係を考える、ということ自体が都市デザインだと思いますし、それから例えば、子どもの目線から見た環境のあり方を考える、というのも、やはり都市デザインの一つでもあると思いますね。それだけ、ではなくて、そういう視点も入れていく、ということです。

福祉はまさにそうですね。例えば、福祉の視点でまちを考えていく。だけれど、それだけで全部仕切れるわけではないので、いろんなことの中の一つとして、その福祉の視点も入れながら、じゃあ、どういふふうにしていくか、ということを考えることが都市デザインの一つの局面でもあるのだと思うのですよね。全てに関連していると僕は思います。具体的に何を、というのはちょっと出ないのですけれども、その場その場で、いろんなことを考えられると思います。

鈴木：全体と部分みたいな話で言うと、基本的には、横浜に都市デザインのマスタープランがあるか、という別はないのですよね。全体としては、こういうふうな積み重ねがあつて、まちづくりをやってきたので共通理解はあるけれども、基本的には、その部分の集積みたいなものが横浜の都市デザインの本質ではないか、と思う部分もあります。もともと実験的プロジェクトでやってきたものが集積していつて、何となく全体の構造をつくつていつている、ということもあると思う。

新しい視点という意味で言えば、子どもの目線だとか、福祉のまちづくりとの接点とかは、これから重要になると思うのですね。高齢化が進んでいく中で、社会保障に掛けるお金が膨らんでいくわけです。今、言われ始めているのは、それは医療とか福祉の問題だけではなく、もっと人が歩けるまちづくりなのです。高齢者の人でも安心して歩いていて楽しければ、どんなまちに出るじゃないか。そういうところから問題を捉え直していかないといけないだろう、という話が多いですよ。

防犯もそうなのですよ。犯罪が起きるところはマ

ンションの駐車場とか、ショッピングモールの駐車場がすごく多いのです。死角が発生している。このようなまちでは安全を保つことは難しいのです。犯罪の少ないまちのあり方みたいなものは実際に議論にあがっています。恐らく、そういう全く関係ないところから、新しい都市デザイン・ニーズみたいなものが出てくるのではないかな、一見、関係がなさそうなところから出てくるのではないかな、という気もしますよね。

菅：例えば、福祉として段差をなくしてスロープを設置する方法がありますが、僕は金料玉条みたいにやりたくないのです。磯子の「根岸なつかし公園」では旧柳下邸という古い建物を保存し、市民が利用できる施設として活用しています。日本の古い住宅ですから、玄関は地面から50cmぐらいの畳の間の高さに上がる。もしそこをスロープにしたら台無しになってしまう。その代わり、一遍に上がるのではなくて、1段、2段というような段を付けて、小さな階段状にして、それでも車椅子がどうしても来た時には、取り外しできるようにする。ちょっと急なのですけれども、そこを何か介助の人が押して上げれば入るようにすればいいだろう、ということで認めてもらいました。

非常に細かいことなののですけれども、そういうことも含めて全体を考えていくことが、拡大解釈になるのかどうか知りませんが、多分、田村さんが「環境計画」と言っていることの一つなのだろう、と僕は思っています。

市民参加型でも事前に課題を整理・提案

受講者：こういつたまちづくり計画とかを、まちづくりの計画をされる際に、市民を巻き込む工夫というか、いろいろ図面とかカラフルで何か面白そうだな、と思うのですが、周りの人に興味を持ってもらう工夫として、何か心掛けてらっしゃることとかありますか。

菅：今は、ほとんど全てのそういう計画はワークショップのような形で市民の意見を聞いたりして、それから、まとめていくのですよ。ですから、そういう面では、自分たちでこうしたらどうだろう、ということを作って、

押し付ける、ということはまずないですよ。ただ、僕自身が思っているのは、こちらが何にも案を持たないで市民の意見を聞いてもしょうがないな、ということ。だから、事前のちゃんとした調査をする。データを整理したり、課題をある程度、整理して、こういう課題があるんじゃないか、というのをまず提示する。

だけれど、漏れているかも分からないし、課題の重要性の捉え方が、僕らとそこの住民の方とは違うかも分からない。こっちの方が大切だと思ったり、僕らはこっちの方が大切だと思っけていても、違っていたり、とか、そういうのがあつたりしますよね。そういう面での修正は常にフィードバックしながら、それをもとに「じゃあ、こういう案でやりましょう」と提示すると「この部分が違うんじゃないか」とか「ここ、もっとこういうふうにした方がいいのではないかな」というのが出てくる。それを修正すればいいわけで。だから、それは大体、皆さんおやりになっているのではないかと思います。

最初に、そういう市民参加型でやろう、と言った当時は「御用聞き」をやればいい、みたいな考え方で取り組むコンサルもいしましたが今はそういうことはないと思います。専門家は専門家の役割があるわけですよ。市民は当然、ユーザーとしての発言をしなればいけないし、行政なり僕らみたいなプランナーなりデザイナーは、専門家として、それなりにちゃんと相手、ユーザーの方にぶつけなければいけないわけですよ。そこのやりとりの中で、ちゃんとした答えが出てくればいいわけで、「何でもいいですから、言ってください」という話ではないと思います。プランナーは行政と市民の間の翻訳者であると共に、双方の考えを止揚した考え方をモデルとしてデザインにするデザイナーであると思います。そういう面で絵(図)を描いたりするのはやる。それは、一般の人があまり理解できないような絵(図)ではなくて、できるだけ分かりやすく、というのは心掛けています。そして、ワークショップに参加する人は限られていますから広報はとても大切ですよ。だから、僕らはいろんなところでワークショップをやるには1週間程のうちにまとめて、議論の内容や方向などをニュースにして、広報するというようなことをします。それは大切ですよ。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

未来の市民のために仕事をする

鈴木：今の話は、実はすごく核心に触れる話でもあって、ワークショップ型で計画を作る際にインハウスで何かプランを作って示すことができなくなってくるわけですね。外部の専門家だから提案できる、という部分というのもある、それを田村明さんはよく「今の市民のために仕事をすべきではない。未来の市民のために仕事をするんだから、そこで住民たちが気付いてない価値だとか、そういったものをきちつと提示できなければ、それはプランナーとは言えんのだよ」ということをおっしゃっているのをよくお聞きした記憶があるのですけれど。

そういう意味ではやはり、外部の専門家だから言える、提案できる、という部分があるのではないかな、と今、お話を聴いていて改めて思いました。

また専門家と行政の関わりはすごく難しい部分がありますね。市民、プランナーなどの専門家、行政間の関係性は、なかなか難しいものがあって、それを持続的に維持していくほど難しいですよ。つまり、無数に地区はあるわけです。横浜だと区の数で言っても20近くあるわけです。それぞれの現場に全てプランナーを張り付ければいいのですけれども、一方、専門家もやはりフィーがあつて初めて成り立つ部分もあるので、その全部がボランタリーに付き合えるわけではない。

山手の話を聞いていると、ボランタリーで付き合い合われている部分はかなり大きいようにも思います。そうすると、長年のパートナーシップで築き上げていく信頼関係みたいなものを維持することも、できるどころとできないところと、かなり分かれるのではないかと、という気もするのです。最後にそこら辺の、どういう関係を構築するのか、というところで、何かヒントがありましたら、お聞きしたいのですけれども。

お金の問題もきちんと話し合う

菅：本当に、今の時代は難しい時代ですよ。山手でもボランタリーだけで付き合っていけないので、助成

財団に申請を出して助成金を獲得するとか、というのもやっています。僕らと地域の人たちとの関係も、お金のやりとりも含めて、きちつとしていかないといけない、と思っています。

あと、これはずっと、同じ仕事をしてきたおかげでもあると思いますけれども、行政の皆さんと割にフランクに話ができる、というのはとてもありがたいことです。もちろん基本的に発注者と受注者という関係はまず、仕事をやっている以上はあるので、踏み越えてはならない法、というのは当然あるのです。ただ、お互いに一緒に仕事をしている、ということからすれば、そういう法を踏み越えない範囲で、もつとフリーにいろいろ話をする、というのは大切なですよ。それは、横浜の場合はできる、幸いなことにできていけるな、という感じがある。ところがほかのまちに行くと、なかなかその辺が難しいのです。

市民との関係では、特に山手とは長く付き合っている、お金の問題も含めてフランクにできる。「これはボランティア的にやるけれども、これはそうじゃないから勘弁してください」という話もあるし、もう一つは「じゃあ、分かりました。何かで、こちらで食いつ持を算段します」という形でお手伝いする。それができない時は、行政にもお願いしなければいけないし、地元の方にも、少し面倒見てよ、とかいう話も当然しています。それが大切なことだろうな、というふうに思っています。ちよつと答えになってないかな。

鈴木：プロフェッション、職能ということを考えた時に、そういう仕事を継続できる環境がなければ、そのプロフェッションはなくなっていってしまうわけです。専門家の存在意義を、もう一回認識する必要がありますし、そういう人たちが活躍できる場をつくっていくことも、すごく重要になってくるのだと思うのです。

今、都市計画だとか都市デザインのノウハウは、民間にかなりあるのではないかと、とも思います。ノウハウのある専門家は外にいて、その外の専門家が都市計画を支えている、という状況であると思います。そういう状況が続いていくと、行政も先細りするし、やは

り仕事が減ってくる、となると、民間のプランナーもかなり苦勞する状況がある。それが継続的な、いい循環を生むに至ってない、というのは全国的に言えることなのですね。数年前に日本都市計画学会で「民間プランナー論」というのを、私が担当で編集した時に、アンケートを取ったら、そういうことが如実に見えてきたわけです。そこを横浜がどう乗り越えていくのか、というのがこれからの課題ではないかな、と思います。

菅：今、入札が増えてきています。昔は「この仕事の性格、内容、あるいは求めるものからすると、こういう人にやらせるのがいいだろう。お金で決める話ではないだろう」という考え方があったのだろうと思うのですけれども、近頃はそれが少なくなっているようです。

入札が必要な部分があります。例えば、建築の設計図面が全部できて、仕様がはっきりしているケースでは、価格競争は存在すると思います。商品を買う時に、皆さんがいろんなお店を回って、どこが安いかで決めるのと同じです。

だけれど、都市デザインの仕事は「こういうもの」というのがないわけですよ。まず仕様書でこういうもの、とか、どういうふうにつくるか、というのは何も無い。それをお金で決める、というのは難しい。そうではなくて「こういう内容を求めているので、それに答えを出してくれそうな人が誰なのか」とまず探す必要があって、誰でもいいから安いところ、というのは基本的に難しいと思います

昔と比べると、横浜以外の地域も含めて疑問に思うことが増えてきて、悪循環で全体を悪くする方にならないか、と心配しています。

鈴木：民間の立場から都市デザイン、ということで、かなり盛りだくさんに語っていただきました。どうもありがとうございました。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好